

# 100年前の『貧乏物語』

しみず ひでゆき  
清水 秀行

●日本教職員組合・書記長

今からちょうど100年前の1916年に、『貧乏物語』という評論が朝日新聞に連載された。筆者は戦前の経済学者、河上肇だ。その書き出しにはこう書かれている。「驚くべきは現時の文明国における多数人の貧乏である」…つまり、「驚くことに、現在の文明国には、多くの貧困の人々がいる」と述べている。時代は、明治の終わりから大正のはじめで、文明国は、当時の最強の先進国イギリスを指している。産業革命によって著しい発展を遂げ、世界一の文明国となったイギリスは、その豊かさとは裏腹に、格差が生み出され、貧困が量産されてしまったというのだ。

当時の日本は、日清・日露戦争に続き、朝鮮半島への侵略など、近隣のアジアとの戦争に明け暮れ、その陰で、多くの人々が兵役にとられ、戦費の負担を強いられ、国民の生活は苦しくなるばかりだった。「働けど働けど、なおわが暮らし楽にならざり、じっと手を見る」…そう詠んだ、石川啄木の『一握の砂』が出版されたのは、1910年、明治43年である。この年は、「韓国併合」の年でもあり、日本の軍事化がいつそうすすんだ年だ。そして、4年後の1914年、日本は第一次世界大戦に参戦する。その2年後、1916年、大正5年に書かれたのが、『貧乏物語』だ。

筆者の河上肇は、この評論の結論として「金持ちが奢侈をやめることで、富裕層と貧乏人の格差をなくす」ことの大切さを説き、国の生産力を貧しい人々に向けるべきだと主張している。

河上肇は、山口県出身だ。100年後の今日、同じ山口県出身の安倍首相のもと、格差は広がり、貧困は深刻な問題となっている。

現代の思想家、内田樹さんは「グローバル資本主義は、もう限界に来ています。右肩上がりの成長は、もう無理です。収奪すべき植民地も、第三世界ももうないからです。投資すべき先がない。だから、自国民を収奪の対象とするようになった。貧者から吸い上げたものを富裕層に付け替え、あたかも成長しているかのような幻想を見せているだけです」と述べている。

民主主義というのは、実は危険な仕組みとも言える。一時的な熱狂で、圧倒的な議席を得たとしても、選挙という民主的な手続きを経て以上、合法的な政権として国民からの委任を受けたことになる。だから、そうした政党・政権が、国の根幹に関わる制度や原理を、簡単に変えることができないように、憲法があり、三権分立があり、衆議院・参議院の二院制があり、内閣法制局がある。しかし、今、そうした暴走を阻止するための「ブレーキ」が、一つずつ解除されている。

夏の参議院選挙は、格差社会の是正、少子・超高齢化対策、教育や子育て支援など、争点となるべき課題は、もっと別にあると思うが、憲法「改正」を争点にするというならば、平和・人権・環境・共生、そして民主主義を守るため、子どもたちに戦争のない、平和な未来を引き継ぐため、ひと踏ん張りするしかない。